

Facilities
Profile

[四国ロースクール]

四国ロースクールとは、香川大学大学院 香川大学・愛媛大学連合法務研究科の愛称で、香川大学と愛媛大学との連合により、香川大学内(幸町キャンパス)に設置された法科大学院のことです。親身になって地域住民を支え、地域経済を担う法曹を養成する目的で設立され、密度の高い少人数教育を行っています。

高橋正俊

PROFILE

たかはし まさとし
法学部教授
法学修士
専門分野:憲法、行政法



教員・施設とも充実した環境が整備されています。厳しい指導も学生の将来につながると信じてこそ。

愛媛大学との連合ロースクールが
四国を弁護士の過疎地から救う。

法律家への道

裁

判官や弁護士、検察官などの法律家になろうと思ったら、「司法試験」という大きな関門がある

というのは、法律家を目指していない人でも知っています。そして合格率がとて低く、何年も挑戦し続けている人が少なくないという話もよく聞きます。しかし、その超難関「司法試験」のルールが昨年から変わり、現在「新司法試験」に移行しつつあります。新司法試験は旧試験に比べて合格率が大幅に高くなっていますが、代わりにロースクール(法科大学院)卒業が必須。つまり法律家になりたい人は、まずロースクールを目指すことになったのです。

香大のキャンパス内にある、愛媛大学と連合で創設されたロースクールの初代科長が高橋教授。「実は四国は弁護士の過疎地。法律の相談をしたくても、近くに弁護士がいらないというのが切実な問題なんです。この状況をなんとかしないとけないという思いが

お互いの大学にあって、いろいろな問題を乗り越えて連合でロースクールを立ち上げることができたんですよ」と創設のいきさつを教えてくださいました。設立までの苦労はありましたが、ロースクールとしての環境は全国でもトップレベル。「徹底した少人数教育なんです。1学年30名の学生を20名の専任教員がしっかりと教えます。教員一人あたり学生1.5人ですからね、手厚く丁寧な指導が可能なんです」。もちろん、施設も充実。自習室は24時間、ほぼ年中利用可能で、パソコンやコピーも原則自由に使えます。本や資料も主だったものは学校側で揃えているので、地方だから困るという状況がありません。ただ、それだけに学生側に期待されている努力も半端なものではないですよ。」「3年間で法律実務までを理解してもらわねえから楽なものではないですね。だいたい1日10時間の勉強を前提にしたカリキュラムになっています」とのこと。3年間、法律

の勉強だけに専念する覚悟を必要とされています。「確かにハードかもしれませんが、あとになってからこの時期のことを振り返った時、充実した勉強の時間だったと懐かしく思えるはずですよ。私にも経験があるんでわかるんです」と語ってくれました。

ところで、高橋教授からは「ロースクールの学生は、社会人から入学する人も多いですよ」という意外な言葉も出てきました。大学卒業の資格があれば、誰でもロースクールの入学試験に挑戦できるそうです。しかも「入学試験は適性検査と小論文、面接です。法律の試験があると思っている人が多いみたいだけど、我々としては素質のある人を見つけて、3年間で磨き上げることを目的にしているんです」とのこと。

ロースクールのおかげで可能性は大きく広がられました。四国を弁護士の過疎地から救うのは、あなたかもしれません。

1,000分の1の奇跡。

夏

「一番暑い時期に田んぼに入り、学生と一緒に毎日泥まみれになって育てたのが、さぬきよいまいです」。日に焼けた肌と土のついた長靴が、この日も表で作業していたことを物語ります。楠谷教授は昨年10月、香川県初の酒米として品種登録された『さぬきよいまい』のキーマン、いわば生みの親と言うべき人。おいしい地酒を造るべく新しい酒米品種の育成に着手した彼と卒論研究の一貫として参加した学生たちを中心に、周囲の人みんなの協力で実に11年かけて真正銘「讃岐の酒米」を誕生させました。掛け合わせた品種は、県内で最も多く栽培されているオオセトと高級品種の山田錦。「つまり、この2品種を母親と父親とし、そこから子どもや孫、従兄弟やハトコまで最初の3年は子孫の数を増やすことに集中しました。全部で1000種くらいになった時に、その中から成分や構造が目的にあったものを選ぶ作業を開始しました。」と

てもじゃないけど、へえと聞きながせない数。大規模な品種改良であれば、年間100種以上の交配を行ったとて10年かかる一大スペクタクルなだけに「私の場合はまだラッキーですよ」とおっしゃいますが、実際に1000種1つひとつの品質や成分を研究し、細やかな調査を続けてきたのは他ならぬ彼らなんです。「タンパク質が少ない(雑味がない)、大粒である(削る際に多く残る)、心白という白濁部分がある(麹菌が入りやすい)ことが酒米の特徴。1000から500、300と条件に近いものを絞っていくんですが、まあ地味な仕事ですよ(笑)」。いいえ、きつと気の遠くなりそうな作業です…。最終的に残ったのは31種。これらにKU・1からKU・31までの通し番号をつけ、その中から父親と母親のメリットを併せ持ち、収量も多いKU・16が『さぬきよいまい』という名前で品種登録されました。教授、出来上がったお酒はいかがで

した? 「いや、酒は何でも飲む方なんです直分かります(笑) だが、今は娘を嫁に出したような気分です。嫁ぎ先の農家で力一杯頑張る末永く可愛がってもらえるかどうか、期待と不安が半々です」。そう言って笑う楠谷教授の表情は、1人娘を立派に育て上げた父親のよう。現在は稲の有機栽培を手がける傍ら、中国の留学生らと一緒に母国の米をおいしくするための品種改良を目指しています。が、やはりこれらも10年単位の長き研究。「私の後も、学生たちが受け継いでくれたらうれいすね」と、教授は今日も稲たちを育てます。時々「娘」を思い出しながら。



学生たちの献身的な努力もあって、さぬきよいまいは誕生しました。



信頼する学生達と共に、今日も土に触れて新たな研究に励みます。



香川で生まれた稲が、中国の大地で豊かに育つ日がやがて訪れるでしょう。

KEYWORD

【さぬきよいまい】

香川県独自のブランド酒米で、県農業試験場と県酒造協同組合、香川県農協とともに農学部が1990年に着手。醸造に適した品質である「良い米(よいまい)」で造った酒で心地よく「酔ってください(酔いまい)」との意味を込め、真鍋知事が命名した。現在は綾菊酒造、川鶴酒造、西野金陵、丸尾本店が醸造している。

香川県初の酒米

『さぬきよいまい』は学生たちの協力があってこそ、誕生したんです。

楠谷彰人

PROFILE

くすたに おきひと
農学部教授
農学博士
専門分野:作物生産生態学

KEYWORD

[経済学部]

香川大学の経済学部では「経済学科」「経営システム学科」とあわせて「地域社会システム学科」という少し聞き慣れない学科がある。自国をはじめ世界各地域の社会・文化・歴史を総合的に学習することで、よりグローバルに活躍できる人材を育成することが目的である。

映 画を観たり、本を買ったりすることは、たいていは自分の意志で行うもので、その理由は「観たかったから」「読みたかったから」というのが普通です。でもその「観たい」とか「読みたい」という欲求が、時には自分でも無自覚な、大きな流れの中で生まれているかもしれない。福間准教授の研究や著書からは、そんな「無意識の常識」の存在に気づかされます。

福間准教授は昨年『反戦』のメディア史―戦後日本における世論と輿論の拮抗』という本を出版しました。反戦というテーマは、人によって考え方や主張が違う話題ですが、福間准教授の視点はイデオロギーに関するものではありません。反戦をテーマにした映画や書籍が、時代によって受け取られ方が違うことに注目して、映画のヒットの裏にある「無意識の常識」を読み解いていくものです。代表的な例として、『ビルマの豎琴』と『二十四の瞳』が挙げられています。

反戦の意味が込められたこの2作品は、ともに1950年代、そして1980年代に映画化されました。その興行成績を比べてみると、50年代の時には『二十四の瞳』が空前のヒットとなり、『ビルマの豎琴』は20位以下と低迷しましたが、80年代では『ビルマの豎琴』がヒットを飛ばし、『二十四の瞳』は制作費も回収できないという結果に逆転しました。「戦後間もない50年代には被害者のな心情で観賞できる『二十四の瞳』が心地よかったのせいで、80年代になると日本人の戦争への感情も変化したのです」と准教授。映画の興行成績は作品としての出来に左右されると考えるのが一般的ですが、「内容が同じでも時代によって受け取られ方が違う」という視点で掘り下げていくと、違った理由が見えてくるのです。

福間准教授の研究は、こういう国民的な「無自覚な常識」が、どのように作られてきたのかを探ること。「その時代の『正しさ』が、いかにして『正

しい』と認識されたのか。そういうことを研究しています。当たり前と思われていた常識を疑い、解体するんです。歴史学であり、社会学であり、地域研究でもあり……と複数の学問が絡んでいますが、だからこそ一方的な見方とは違う角度から物事を見ることができるといいます。さらっと語っていますが、常識を覆すということもスリリングなことをやっているんです。

そんな福間准教授のゼミはというと、「基本的には自主性を重視しています。私が強制して指導するようなことはありません。勉強は決して無理矢理させるものではないと思っています。自分で感じるものという気がしていますね」という自由な雰囲気。課題についても自分で考えていいそうです。「課題はあくまでも自分の意志とプライドで設定するものですからね」と、厳しさもチラリ。テーマへの真剣な取り組みが、スリリングな研究を可能にするのです。

その時代の「正しさ」はいかにして「正しい」とされたのか。

常識を疑い、解体する。



准教授の研究室でのゼミでは、ユーモアを交えつつ真剣に学生の意欲を引き出します。

PROFILE

ふくま よしあき
経済学部准教授
博士(人間・環境学)
専門分野:歴史社会学・メディア史

福間良明